

西日本

今回紹介する本は、56年前の明日、すなわち8月27日にあった秘話を記している。20世紀屈指のロックスター、エルビス・プレスリーとジョン・レノンの最初で最後の出会いの物語だ。

けんか別れに終わったため写真すら残らないが、対面をお膳立てした英国の芸能記者クリス・ハッチンスが2人の死後に出版した本「エルヴィス・ミーツ・ザ・ビートルズ 永遠の宿敵で細かに再現している。

レノン少年時代に、プレスリーの「ハートブレイク・ホテル」に感激してロ

朝刊太郎の雑記帳

かみべつが やすし
上別府 保慶

ツクンロールにのめり込みギターを買った。プレスリーも、自宅のジュークボックスにビートルズのレコードを入れて聴いていた。

1965年、ビートルズの4人は2度目の訪米でロサンゼルスでプレスリー邸に招かれた。それはイランの国王や大女優のリタ・ヘイワースが前に住んだ屋敷で、4人は暖炉があるパーティー部屋に通された。

プレスリーはU字形ソファの真ん中に座り、隣には婚約者のプリシラ、周囲には取り巻きたちがいた。

レノンは映画「ピンク・

レノン VS プレスリー

パンサー」のクルーザー警部の声色で「おお、あなたですね!」とおどけたが、今風に言えば滑った。4人はプレスリーの両脇に座ったものの気まずい沈黙が漂う。プレスリーにはここ3年以上ヒット曲がなく、米国のチャートを席巻するビートルズにどう向き合おうか戸惑っていたのだ。

プレスリーはいじつていたテレビのリモコンを放り出し「君たちみんな、そうやってぼくをじっと見ているつもり? 音楽について話したり、ことによったら、ちよっと一緒にプレイして

もいいのに」と言った。皮肉屋のレノンと違ってなかつたし、愛国者としてベトナム戦争を支持するのにも失望していた。

兵役で陸軍軍曹まで務めたプレスリーは立ち上がった。「あいつは頭がイカレきってるぞ」。怒りは後々まで収まらなかつた。米政府に手紙まで書いた。レノンの国外追放を求め、

95年にシンコー・ミュージックが出版。福岡市総合図書館などにあるが今は新型コロナウイルス禍で閉館中である。

(特別編集委員)